

これからの博物館の役割と機能 —欧米の自然史博物館の最近の事例に学ぶ—

真鍋 真¹⁾・森田 利仁²⁾・斎藤 靖二¹⁾

1. はじめに

近年, 地方自治体の自然系博物館の整備が進むにつれ, 生涯教育の場, 理科離れの潮流を変える場などとして, 博物館への社会的な要請が日増しに高くなっている。博物館にとっては, その存在を広くアピールできる時代を迎えたのだが, その結果, 「学芸員」に求められている仕事量と業務の多様性の増加は著しい。今後, 博物館が「開かれた博物館」として, 時代のニーズに応じていこうとする限り, 博物館スタッフの仕事は, 質, 量ともに増加する一方である。そのため, 一人の人間が, 研究, 展示, 教育, 普及, 標本管理の全てを網羅できるような時代ではなくなりつつある。それぞれの適性をふまえた人材配置をしていかなければ対応できないといっても過言ではない。今一度, 博物館のあるべき姿を議論し, 博物館法の学芸員資格等のシステムからも変えていかなければ, 「開かれた博物館」は看板倒れとなってしまうであろう。

2. 変貌するキュレーターの定義と厳しい現実

学芸員とはCurator(キュレーター)の訳語で, これは人や物を管理するという意味のラテン語から派生し, 博物館の標本管理者としては, 1767年に大英博物館の記述の際に初めて登場した言葉である(Oxford English Dictionary, 1994)。その後, 管理する標本に基づいた研究を行い, その成果を社会に還元していくという意味を持つようになっ

ていった。

日本の平均的な学芸員は, 欧米のEducator(エ

デュケーター)の職務も兼ねている。欧米の一定以上の規模の博物館では, 標本の「管理+研究」と「教育+普及」を兼務する例は少ない。これは2つの職務の適性に, 必ずしも相関があるわけではないからである。

近年, ロンドンの自然史博物館(BMNH)では, さらに標本管理職と研究職を明確に分離するシステムを導入した。これは, 分業化の進んだ北米的なシステムへの移行とも言える。BMNHの場合, サッチャー政権が博物館や美術館を独立採算の比重を高くするシステムに移行させた結果, 給与の高い研究職を減らさねばならなかった経済的な理由によるものであるが, 几帳面に標本を管理する適性と, 自由な発想で研究を行うという適性にも, 必ずしも相関があるわけではないという考えによって正当化された。

この結果BMNHでは, Curatorとは標本管理を専門とする職員のことで, 北米のCollections Managerとほぼ同意で, 研究職はResearcherと呼ばれるようになった。しかし, その移行過程で, 研究部の290のポストの中50ポストを廃止もしくは配置転換し, 主力研究分野以外はコレクションの管理だけを行うようにした(Butler *et al.*, 1998)ため, 一部の研究者から研究権を剥奪することになり, 研究者の評価基準の是非など様々な議論をよんだ。1997年春に公募されたBMNHの古生物のCuratorの応募資格は, 高校卒業程度, 生物又は地学を履修したこととなっており, 更に分業化が進んだ感がある。このように, 近年, 欧米の博物館では, キュレーターの定義が変わりつつある。世界的にも博物館スタッフのアイデンティティを再確認する時期にあるの

1) 国立科学博物館:
〒169-0073 東京都新宿区百人町3-23-1

2) 千葉県立中央博物館:
〒260-0852 千葉県千葉市中央区青葉町955-2

キーワード: 自然史博物館, 学芸員

るのだ。

北米では、標本管理部門、研究部門、標本剖出などの技術部門の職務の分業化が確立している場合が多いが、このような機能の分業化がすべてにおいて成功しているとも限らない。そこには、雇用される側への厳しい側面も存在するのである。たとえば、カナダのある博物館では、標本剖出を専門とする技師 *Preparator* たちが、作業をしている標本について興味を持つと共に、作業上の必要性から、図書館に出入りし文献を調べることに多くの時間を費やすようになった。これを見た館長は、技師は作業室で作業をするために雇用されているとして、技師たちが勤務時間内に図書館に出入りすること禁止してしまった。これに対して、短期間の仕事能率を優先させようとする極めて近視眼的な措置として反発がある一方、分業体制の維持のために支持する意見も少なくなかったそうである。

フランスの国立自然史博物館(パリ)は、最近の政府報告書の中で、研究以外の博物館の使命が十分に果たされていないという指摘を受けた (Butler *et al.*, 1998)。これは、博物館の研究者が研究業績によってしか評価を受けないという、構造的な欠陥によるところが大きいという。博物館の研究者のために、大学の研究者に偏った社会認識を変えて行かなくてはならないのは、世界的な課題のようである。

3. 日本の学芸員

欧米の博物館先進国と日本を比較するとどうであろうか。まず、日本の博物館法の学芸員という名称は、博物館のすべての業務に従事する、極めて曖昧に定義されている職種である。日本の博物館法によると、「博物館」とは、歴史、芸術、民俗、産業、自然科学等に関する資料を収集し、保管(育成を含む。以下同じ)し、展示して教育的配慮の下に一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資するために必要な事業を行い、あわせてこれらの資料に関する調査研究をすることを目的とする機関(社会教育法による公民館及び図書館を除く)のうち、地方公共団体、民法第三十四条の法人、宗教法人または政令で定めるその他の法人が設置するもので規定による登録を受

けたものを言う(博物館法第二条)。また、同法によれば、学芸員とは、博物館資料の収集、保管、展示及び調査研究その他これと関連する事業についての専門的事項をつかさどる(博物館法第四条、三・四)役職のことである。

この「博物館」の定義を、イコム(国際博物館会議)、イギリス博物館協会、アメリカ博物館協会のそれぞれの定義(アンブローズ・ペイン, 1995)と比較すると、日本の博物館法は、研究よりも展示が先に挙げられていること、イギリスは資料の収集、記録に重点を置き、「研究」を唱っていないことなどが特徴である。日本の「学芸員」は、学芸員資格、その養成方法から言っても、専門性を否定したジェネラリストである。

4. 博物館の個性

日本各地には、あらゆる形態の博物館があり、それぞれの博物館内のソフト面での機能の分業はもちろんのことではあるが、個々の博物館の個性化、分業化についても議論されるべき課題であろう。現在は、国立の博物館、地方自治体の博物館、大学博物館、私立博物館、サイエンスセンターなどが、みな同じ目的のために機能しているような部分があまりに多く、存在の意義が明確にされていないように感じられる。イギリスの自然系博物館は、ロンドンの自然史博物館を筆頭に、その他の国立博物館と多数の地域博物館、大学博物館などからなる。地域博物館は、その地方の資料を収集、保管、展示、教育、普及を最優先項目とし、大学博物館は、大学の所蔵する財産の保管や、その大学の研究履歴を反映させることによって個性を主張している。国立や大学の博物館は、大学等と連携した高等教育の機関でもある。日本の場合、せっきくの多様性が活かされていないばかりか、個々の博物館が全ての機能を全うしようとするあまり、個性のない博物館が全国にあふれ、その機能の多さ故に、目的が達成されていないのではないだろうか。

今後、博物館が、生涯教育の場や、理科離れの潮流を変えるような役割を担っていくとするならば、より個人レベル、小グループレベルの学習環境を整備していかななくてはならないだろう。たとえ団体で博物館に訪問したとしても、博物館の利用とい

うものは、非常に個人的な行為、つまり自由選択の学習環境であるからである(フォーク・ディアキング, 1996)。博物館が、より小グループ、個人レベルのニーズに応えるような試みもされているが、これも単発的な「行事」に過ぎないことが多い。これからは、経験を積み重ねていく体系的なシステム作りが必要であろう。欧米では、教育プログラムにおいても、博物館学、学校教育学、認知心理学の専門家に、芸術家などが加わり、多彩な実験、研究が行われている。これは、博物館が、独特な教育環境を提供するという認識に基づいている。日本においても、大学院レベルの博物館学の整備が重要ではないだろうか。学芸員の再教育、研修の場として、大学博物館の役割が期待されるが、大学院システムの中に取り入れられたものでなければ、体系的なプログラムに発展することは期待できないだろう。また、こちらから活動を提供するというアプローチには、現在の陣容では限界があることは否めない。図書館のように、自由な学習の場と素材を提供すると言ったアプローチも必要であろうし、そういったニーズもあるはずだと思われる。

5. 収蔵資料情報のデジタル化

近年、日本でも博物館の収蔵資料情報のデジタル化、そしてインターネットなどのメディアでの公開が進められている。世界的にも、経済協力開発機構(OECD)がGlobal Biodiversity Information Facility (GBIF)プロジェクトにより、世界規模の動植物データベースを整備する方針を進めており、これが世界中の自然史博物館の潮流であることは間違いない(Butler *et al.*, 1998)。日本の博物館のデジタル情報というと、情報公開的な意味合いが強く、所蔵標本を広く知ってもらうという目的が主であるようだ。それ自体には何の問題もないが、GBIFの目指すものは、現生の動植物の場合は、分類キーなどから検索者が手許にある標本を同定できるような総合的なシステムの構築である。そのため、分類形質、三次元的な計測データなど、標本に基づく基礎研究がなくては意味をなさない。標本の研究がないまま、データベースのデジタル化を進めても、それはただのデジタル画像集にしか過ぎないだろう。

6. 博物館における展示

博物館の顔ともいえる展示についても、欧米を中心に学際的な研究が進められている。展示ラベル一つの提示の仕方についても、ドイツ人古生物学者アドルフ・ザイラッハー(独・チュービンゲン大/米・イエール大)は、「○○の生痕化石、学名、産地、地層名」といったラベルが一般的だが、それは一部の専門家かマニアにしか重要ではない情報であり、一般来館者にとっては、「△億年前の深海底を○○が歩いた証拠」といったような、広い層に訴えたいリードに、標本の情報を小さく添えるべきであると語っている。

全米博物館協会は、博物館を、学校や図書館、テレビ、雑誌などの教育形態から明確に区別している。これは、他の機関が言語や二次元の図像を手段として用いるのに対し、博物館がその目標を達成するために三次元の物体を展示するという手段を選んでいるという事実が、博物館をユニークなものにしているのである。長いラベルを付けた展示が成功しないのは、博物館が書かれた文字による伝達には最適の装置ではない、長い文章を読むのには適さない環境だという指摘をしている(フォーク・ディアキング, 1996)。

そこで、最優先の知識の伝達のために簡潔なラベルを付ける博物館が多く、博物館は展示を通してきっかけを与える、興味のない人たちにTVのCMのような、「いつの間にか見ていた」という展示が望ましいという意見がある。科学産業技術の展示に関する欧州コンソーシアムのクインは、「展示だけでは十分な教育とは言えないというコンセンサスがある。展示はきっかけを与えるものである。ひとたび興味が喚起されたら、学校やその他のあらゆるところでそれを活かしていけばよい」と語っている(ノーマン, 1996)。しかし、それに対して、認知科学者ノーマンは、「学び、考え、内省する機会を与えるという難しい仕事を遂行できていない言い訳に、このような言葉を安易な妥協として使ってしまう博物館があまりに多いことに危惧を抱くのである」とコメントしている(ノーマン, 1996)。教室までインターネットが進出し、CD-ROM版の博物館やバーチャルミュージアムが身近な存在となりつつある現代、「きっかけを与える」という博物館の役割は、

減少していくことは間違いないであろう。

BMNHの古生物学研究部長Robin Cocksは、モノがほとんど展示されていないEcology(生態学)の新しい展示について、「生態学は標本では語れない。他では見られない迫力あるAV映像を提供したことが人気の秘密であり、今後もこれが当館の展示の方向であろう」と語っている(Cocks, 私信, 1995)。これは、普段からレベルの高いAV映像に接しており、要求水準の高い日本人には通用しない価値観であろう。パリのラビレットの自然を復元した、実物大のジオラマも、緑が著しく少ないパリと、学校主導の野外活動が少ないフランスのシステムという背景があるからこそその展示である。海外の一流の博物館の人気のある企画といえども、日本にそのまま直輸入できないものが意外と多いのではないだろうか。日本に合った、日本ならではの展示を行うためにも、展示を使った研究の場として博物館が使われるべきであろう。

展示というと、これまでデザインや教育的な経験に目が向きがちだったが、前出のノーマンのように、博物館に関心を寄せる心理学者も少なくない。岡田(1997)は、心理学のマニュアル観察法の教科書の中で、科学博物館で行われた発話分析の研究例を紹介している。アメリカのある研究グループは、親と子がサイエンスについて会話することが、子供の科学的推論能力の発達に重要な役割を果たしているのではないかと考えた。そこで、カリフォルニア州のある科学館を訪れた1,500組以上の家族の会話と行動を分析し、子供達は大人と一緒にいるときの方が、展示の重要な側面に目を向けることが多かったこと、展示について話をする事が多かったこと、男の子と女の子の違いなどの傾向を指摘している。このような心理学的な研究から学ぶことが多いのはいうまでもないが、博物館が、このような研究の場を提供することによって、その研究プロセスそのものに関わるべきなのではないだろうか。

博物館の教育的な評価についても、欧米を中心とした様々な研究が行われている。「評価」というと、とかく優劣の判定を一方向的に押しつけるかのような悪い印象を与えがちである。教育学では「教育の方法や内容の改善を目的とした活動の総称」と定義されているのだが、日本の博物館ではあまりなじみのない活動の一つである(守井, 1997)。日本

の博物館でも「評価」活動は行われてはいるが、それは「入館者(参加者)数」といった単純なモノサシでのみ行われていることが多い。このような評価は、博物館の商業施設の側面しか問題にしない、悪しき傾向を助長しがちである。守井(1997)は、展示や教育プログラムの企画段階の事前評価、デザインの初期段階や教育プログラムの実施期間中に行われる形成的評価、展示完成・公開後、教育プログラムの終了後に行われる総括的评价といった評価の3類型を紹介し、日本の博物館における評価活動の必要性について言及している。

7. 博物館とマーケティング

博物館をディズニーランドやテーマパークと比較することは間違っているが、現代人の余暇の時間をめぐって争っていることは否定できない。これまで博物館のアメニティ、サービス面は「必要悪」とはいわれても(長谷川, 1997)、真剣に取り組みされてこなかった領域ではないだろうか。一般的な来館者にとっては、博物館に一步足を踏み入れた瞬間から、たとえそれがトイレであっても、そこは彼らにとっては博物館であるし、博物館に行こうと思いついたときから博物館体験は始まっているのである(フォーク・ディアキング, 1996)。

滋賀県立琵琶湖博物館では、博物館のイメージについて「博物館と聞いてまず頭に浮かぶ言葉(キーワード)を書いて下さい」というアンケートを行った(布谷, 1997)。約600件の回答の中で、場所に関するイメージが423件で、そのうち「貴重な遺産」、「楽しい」などのプラスイメージが135件、「かたい」、「古めかしい」などのマイナスイメージが288件あったという。全体的には、森羅万象、博物館イメージの混沌さが現れているという。博物館は、その展示こそが主役であるが、それを活かすのも殺すのも、建物とソフトの両方が形成する空間であり、来館者の博物館体験は個人的レベルのものであり、来館者は展示やサービスだけでなく、博物館全体を博物館体験と見ていることがここでも現れているのではないだろうか。欧米の博物館では、マーケティング会社を使った継続的な調査を行い、博物館のアイデンティティを確立すると共に、展示、教育プログラムの更新にも役立てている。

8. おわりに

以上のように、博物館の業務内容は、近年の一般来館者の要求水準の上昇と共に、「学芸員」が一人でこなせるようなものでないのは明らかである。日本の各機関で、いきなり人材を補充することは難しいことであるので、各地域、地方での博物館同士の個性化を図ると共に、各館の連携、人事交流を活発化し、対処していくことも必要であろう。例えば、イギリスでは、単館ではプレparatorなどの専門職員を配置できない地方の博物館が、共同で資金を出し合い、一人の職員をその地域の拠点となる博物館に常駐させるシステムを持っているケースがある。

スペインやイギリスでは、将来博物館の計画はあるものの、地元では今のところ標本管理が出来ない場合に、中央の大学博物館が、地元の標本番号を付けて、代理で標本を管理している例がある。また、美術館であるが、フランスでは、半官半民の組織で美術館連合が組織されており、美術館大学・大学院の運営までも行っている(長谷川, 1997)。

日本では、研究はもっぱら大学でやるもので、博物館が研究を行うところでもあるという理解が得られていないのでは? といった議論があるが、日本から見て理想と考えられてきた欧米でも厳しい経済状況を反映して、博物館が研究機関としてだけ存続していくことが難しい時代になりつつある。存在価値をアピールするために、より社会サービスの活動の増加が時代の要請である。メジャー政権下のイギリスでは、大学でさえ、高等教育を行うのに研究が必要かどうかといった議論まであった。これは、実務教育に重点を置くポリテクニック(大学と同レベルの専修学校、現在では大学に昇格)が、教官の研究に格段の配慮をしなくても、立派に機能していることから出てきた発想である。研究などの発展的な活動がなければ、大学でも博物館でも魅力ある存在であり続けることは不可能なのは明らかであるが、欧米の多数の博物館では、古き良き時代は去り、私たちの理想像とはかけ離れた存在に向かいつつあるのが現状である。

いま、日本の博物館が、欧米の潮流を追ってしまうようなことがあれば、それは極めて近視眼的な選択で、取り返しのつかないことになってしまうであ

ろう。研究活動も、大学院レベルの付置研究機関であり、ポストドクトラルフェローを常に組織の一部として取り込んでいる欧米の博物館と日本の博物館では、研究体制は異なる。また、技官などの研究支援体制も全く違う。日本の博物館は、個人の力量に依存しているのである。その個人個人の専門性を否定するような現状の「学芸員」システムでは、今後、博物館の権威も保たれなくなるのではないだろうか。

欧米の博物館は、膨大な資料を所有していたことから始まり、そのコレクションを基に博物館が存在するが、日本の博物館は建物から始まっているケースが少なくない。つまり、絶対的なオリジナリティーの基盤(資料)に欠けるわけである。だからこそ、資料の充実に努めると共に、ソフト(人材)を充実させて行かなくてはならないのではないだろうか。日本の博物館が欧米の博物館の理想像をめざすのではなく、欧米の失敗例、そして成功例から学び、独自の道を模索する時期に来ている。

日本の博物館が、社会に広く開かれた、魅力ある存在であるためには、組織も人も、それぞれの適性にあわせた仕事の分担とその責任を明確にしていく必要があるだろう。それは、個々の分担の明瞭化(Job description)とその分担に対する評価制度の導入であろう。そして、学芸員個人の研究活動はもとより、高等教育を担うようにならなければ、博物館の将来性は限定されたものになってしまうであろう。館として人材としての多様性を充実させていかなくは、古生物の進化を研究、展示する博物館が、進化から何も学んでいないことになってしまうのではないだろうか。日本の博物館は、hakubutsukanであって、Museumを日本語に翻訳したものではないといわれる(遠藤, 1995)。Museumとは高度な精神的自由を有するヒトが、質量ともに豊かなモノを使って、学問に打ち込む場であり、人類が成熟していく過程で必ずや沸き上がる知的好奇心に、モノとヒトで答える空間であるという(遠藤, 1997)。今、日本では、あらためて博物館と博物館人のアイデンティティが問われている。今、正しい選択をしていくならば、日本でもMuseumの誕生を見ることが出来るのではないだろうか。

謝辞：欧米の博物館の最新の情報を提供して下さい

った英・ロンドン大学 (UCL) 解剖学部, Susan E. Evans 博士, 英・自然史博物館古生物学研究部, Robin Cocks 博士, Angela C. Milner 博士, 英・サリー州博物館評議会, Paul G. Davis 博士, 米・シンシナティ博物館古生物学研究部, Glenn W. Storrs 博士, 米・イエール大学ピーボディ博物館, Christine L. Chandler 氏, 加・ロイヤルティレル古生物学博物館, Elizabeth Nicholls 博士, 独・チュービンゲン大学 (兼, 米・イエール大学), Adolf Seilacher 博士, 認知科学の文献を紹介して下さった金沢大学文学部心理学教室, 吉村浩一助教授, 原稿に数々の建設的なサジェスチョンを下さった国立科学博物館地学研究部, 甲能直樹博士, 教育学の文献を紹介して下さった国立科学博物館教育部, 守井典子氏, また, 本ポストプリントの編集の労をとって下さった豊橋市自然史博物館, 松岡敬二博士に, 心より御礼申し上げます.

引用文献

- アンブローズ, ティモシー・ペイン, クリスピン (1996): 博物館の基礎. 292p. 日本博物館協会.
- BUTLER, D., GEE, H., and MACILWAIN, C. (1998): Briefing museum: Museum research comes off list of endangered species. *Nature*, 394, 115-119.
- 遠藤秀紀 (1995): 哀しいかな, 博物館はMUSEUMに非ず. *Shinka*, 5 (4), 119-121.
- 遠藤秀紀 (1997): 大学博物館はMuseumになり得るか? *生物科学*, 49 (1), 49-51.
- フォーク, ジョンH・ディアキング, リンD (1996): 博物館体験. 215p. 雄山閣.
- 布谷知夫 (1997): 博物館のイメージアンケート. p.9-12. 博物館が出来るまで. 滋賀県立琵琶湖博物館.
- 長谷川栄 (1997): 新しいソフトミュージアム. 300p. 三交社.
- 守井典子 (1997): 博物館における評価に関する基礎研究. *日本ミュージアム・マネージメント学会研究紀要*, 1, 31-40.
- ノーマン, ドナルド (1996): 人を賢くする道具. 397p. 新曜社.
- 岡田 猛 (1997): 発話の分析. p.122-133. 中沢 潤ほか (編) *心理学マニュアル観察法*, 北大路書房.
- OXFORD ENGLISH DICTIONARY (1994): Second edition on Compact Disc. Oxford University Press.
- MANABE Makoto, MORITA Toshihito and SAITO Yasuji (1998): Future roles of natural history museums in Japan.

<受付: 1998年10月1日>